

『上海恋戯』

著:水月真兎

ill:水名瀬雅良

「少佐……」

「あらまあ、珍しい。宮様が酔い潰れるなんて……」

染路は傍(かたわ)らへ静かに三味線を置きながら、男の醜態にも目を細めてやさしげに微笑む。

酔っ払いなど芸者の彼女は見慣れたものなのだろうが、生真面目な真純には上官の無防備な姿を人目に曝(さら)すことは困惑が強い。

「いくら酒に強いといっても、飲みすぎだ」

つつい高月宮への非難めいた声を上げてしまうと、染路はそれを否定するように左右へ首を揺らした。

島田に結い上げた黒髪に、精(せい)巧(こう)な銀細工のかんざしが煌めく。細く白い首筋が儂(はかな)げで、裾模様にモダンな葡(ぶ)萄(とう)の蔓(つる)が唐草のように染められた青い着物から覗(のぞ)く指も、透きとおりそうだった。

どこまでもろうたけたおもての中で、くつきりとした黒い瞳だけが、どこか姉の静佳を思わせる芯の強さを覗かせる。

「いいえ。普段はいくら飲まれたって、正体をなくすようなお方じゃございませんよ。

……来栖様には、よほど気を許しておいでですねえ」

「えっ？」

高月宮をよく知っているらしい染路から思いがけないことを言われて、そんなはずはないと当惑を滲ませた。

いくら直属の部下になったとはいえ、高月宮とは今日出会ったばかりだ。しかも、いきなり挨拶代わりみたいに剣を向けられた。

あれは、真純をスパイとして潜(もぐ)り込ませた中島大佐への牽(けん)制(せい)の意味もあったのかもしれない。とても自分に好意的とも、気を許しているとも思えなかった。

「少佐が気を許しているのは、あなたのほうだろう」

嫌みでも皮肉でもなく、心からそう言った。男だけでなく女も抱けると嘯(うそぶ)いた高月宮と染路は、いかにも馴染みらしく睦(むつ)まじく見えた。

言葉を交わさなくても目つきだけでお互いに通じ合っている様子が、二人が重ねてきた月日を感じさせる。

わざわざ人目を忍ぶような待合などで逢っているのだ。当然、男と女の関係でもあるのだろう。高月宮だって独り身なのだから、芸者と遊ぶのになんの不都合があるわけでもない。

けれど、真純の肩に凭(もた)れてすやすや寝息を立てている男を、染路はどこかせつなげに見つめて笑った。

「こんなふうに大胆に見えても、根は用心深いお方なんですよ。お身内に殺されかけたこともあられるとか……」

「なっ……！」

高月宮の身内といえば、当然皇族だろう。いくら両親が離縁しているとはいえ、それほど邪陰に扱われていたのかと意外な思いを禁じ得ない。

身分が高くなるほど、庶民には理解できない愛憎があるのだろうか。それにしても、殺されかけたというのは穏やかではない。

ただ、東京から離れた京都の山中で育ったという話やあの凄まじい剣の腕前も、そうした事情があるなら決して不自然ではなかった。

海軍内の噂だけしか知らなかった時は、高月宮を周囲にかしずかれ安楽に育ったわがままな宮様としか思っていなかった。だが真純が漠然と抱いていた皇族のイメージほど、この男は楽に生きてきたわけではないのだろう。

「誰といたって、簡単に気を許されるようなお方じゃありません。……来栖様は特別なんですよ、きっと」

「どうして……？」

染路があまりにも確信がありそうに告げるから、真純はわからないと、さらに困惑して呟(つぶや)いていた。

訝(いぶか)しむまなざしを向けられて、染路はいくらか迷い、はぐらかすみたいな笑みを鮮やかに紅を引いた唇へ浮かべる。

「さあ、わたくしのような者には……。でも、来栖様も淋しい目をしていらっしやる」

真純が染路と会ったのは、ここで高月宮と酒を飲んでいたまだほんの数時間だけだ。

染路は、いったい自分の何を見抜いたのだろうと、様々な客を見てきたらしい女の目に畏怖(おそ)のようなものすら覚える。

真純の疑惑を悟ったのだろう。染路はいっそう優(ゆう)艶(えん)な笑顔を見せて、「お気に障(さわ)られたらごめんなさい」としとやかに頭を下げた。

「ふっと、そんな気がしただけです。宮様と、どこか似たところがおありなんじゃないかと……」

曖(あい)昧(まい)な言い訳は、けれどなおのこと真純を混乱させた。真純には、彼女に言われるような心当たりはまるでなかった。

(似ている？ 俺が、この男と——？)

早くに両親を亡くし、他人同然(どうぜん)だった遠縁(えん)の家で育てられ、温(ぬ)かな家庭との縁(ゆかり)は薄(うす)かった。だが、自分には姉(あね)がいた。

美しくやさしい自慢(こぼ)の姉。静佳(しずか)がいたから、どんな貧(ひ)しさにも理不(りふ)尽(じん)な仕打(しうち)にも耐(た)えられた。凍(こ)える冬(ふゆ)も灼(や)けつく夏(なつ)も、真純(まこと)は幸(しあ)せだった。

しかし、この男は皇族(こうしゆ)でありながら肉親(にくしん)に疎(うと)まれ、ずっと一人ぼっちだったのだろうか。

真純(まこと)には、姉(あね)のいない人生(じんせい)なんて考えられなかった。だからこそ、高月宮(たかづきみや)の身の上(みの上)を思(おも)えば胸(むね)が疼(うず)く。

「お水をいただいてまいりましょう……」

染路(しんろ)は気を利(き)かせるように立ち上がり、長い着物(ぎ)の裾(すそ)を引きながら廊下(らうか)へと出て膝(ひざ)をついた。

「宮様(みやさま)は、今夜(こんや)はこちらへお泊(と)まりでしょう。隣(となり)に布団(ふとん)を敷(敷)いてございますから……」

襖(ふすま)を閉(と)めて彼女(かのじょ)が行(い)ってしまうと、真純(まこと)は肩先(かたさき)で正体(まこと)もなく昏(こん)々(こん)と眠(ね)っている男(おとこ)へ溜息(ためいき)を洩(も)らした。

「泊まり……か」

こんな状態で染路と一夜をともにするつもりなのかと呆れながらも、高月宮の屋敷も知らない自分が連れ帰るわけにもいかず、仕方なく重い男の体を抱(かか)え直す。

教えられた続きの間へと引きずるようにして向かい、襖を開けて、真純は思わず息を呑(の)み、さっと頬を染めた。

狭い別室に延べられた艶やかな緋(ひ)色(いろ)の布団には、そこですることを示すように、あからさまに枕が二つ並んでいる。

いかに真純でもおろおろするほど初(う)心(ぶ)ではなかったけれど、なんだか無性に腹が立ってきた。

染路から聞かされた危機感や悲愴さなど今はまったく感じさせない幸せそうな酔っ払いを、突き放すみたいに乱暴に布団へ横たえる。

「うん……？」

その容(よう)赦(しゃ)ない仕打ちには、さすがに寝ぎたない高月宮も瞼(まぶた)をひくつかせ、ゆっくりと目を開いた。

「真純……か。何を怒ってる？」

正直すぎる真純の感情は、そのまま顔に出てしまう。寝ぼけていてもひと目でわかったらしい男は、呑(のん)気(き)に問いかけてくる。

あっさりと気持ちを見抜かれてしまっただけでなく、いきなり名前で呼ばれたことにも面食らった。傍(ぼう)若(じゃく)無(ぶ)人(じん)な馴れ馴れしさもその育ちのせいだろうか。

「いいえ、別に。染路さんは水をもらいに行っています。わたしは、これで失礼します」

自分が思ったことを、考えも立場も違う高月宮に説明するつもりはなかったし、こんな場所に長居をしたくもなかった。

断りを言って荒々しく立ち上がりかけた真純の腕を、思いがけない反射神経のよさで強い力が引き留める。

「ここに泊まっていけないか？」

「他人の情事を拝見する趣味はありません」

この期(ご)に及んで何を言いだすのかと、高月宮の厚顔さには呆れた。大体、染路が戻ってくれば、高月宮にとって自分は邪魔者でしかないはずだ。

「染路は帰す」

言われた意味がすぐにはわからず、しばらく考え込んでから、どうやら染路とではなく自分と寝たいと言われているのではないかと気づき、恥(ち)辱(じょく)にか一つと顔面を紅潮させた。

「なおさらごめんですっ！」

すがりつく手を振り払い、無理やり部屋から出ていこうとする真純の腕を、高月宮は万力のような力で握って放さない。色白な真純の二の腕には、男の指の形が鬱(うっ)血(けつ)になってくっきり残りそうだった。

とはいえ、剣の腕では敗れても、足元もおぼつかない酔っ払い相手に後(おく)れを取るような真純ではない。その手を振り払って、強引に席を立つことぐらいできた。手加減したのは、相手がどんな人間だろうと上官だったからだ。

「味気ない士官宿舎で、剣を抱いて眠るのか？」

「いけませんか」

皇族の高月宮に理解できるかどうか分からないが、海軍の生活を味気ないと思うほど、真純は裕福に育ってきたわけではない。

腹を空かせ、姉と身を寄せ合うように土間で震えながら眠った幼い日々を思えば、温かな部屋とやわらかな布団のある宿舎は十分な贅(ぜい)沢(たく)だった。

そこでどうやって眠ろうか、真純の勝手だ。いくら高月宮が上官だろうと、自分の生活にまで口出しされる謂われはないと相手を睨む。

「まあそれも、おまえらしいが。……真純、淋しくなったら、いつでも俺のところへおいで」

まだ半分夢の中にいるような男にひどく甘く囁かれ、反感と戸惑いが真純の胸でせめぎ合った。

「……失礼します」

高月宮へ返す言葉も見つからず、惑乱したまま座敷を飛び出す。自分がなぜそんな科白に動揺するのもよくわからなかった。

本文 p50～58 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>